

IV－9 都市のイメージ再生技法に関する研究

岩手大学 正会員 安藤 昭
 岩手大学 正会員 赤谷 隆一
 岩手大学○学生員 船水 正雄

1. はじめに

都市環境は人間が自然に対し働きかけ、その上で逆に自然から影響を受けるという人間と自然との力働的な相互変換の上に創り出される。都市環境はそうした相互変換の積み重ねによりその地域独特の特徴を持っている。このような地域の特徴は、個性的なまちづくりにとって今後ますます重要なものになっていくものと思われる。さて、今日このような地域の特徴を見いだすためにマップ描画法や口述法などのイメージ再生技法が広く使われているが、これら再生技法の特性についてはいまだ明確にされてない。以前当研究室で人間が自然に対し働きかける場合（評価イメージ）の再生技法の比較検討¹⁾を行なっているが、逆に自然から影響を受ける場合（地理的イメージ）の再生技法の比較研究は行なわれておらず残された課題であった。

本研究はこの地理的イメージについてマップ法・口述法・言語記述法の3つの再生技法で再生し、その結果を比較検討し、各再生技法の特徴を明らかにしようとするものである。

2. 調査対象地域および調査方法

調査対象地域の選定にあたっては、人間の都市のイメージが重層構造を成して増大するという（B i t t e r - C h u n k の関係）影響を取り除くこと、都市（つまり、市街地と田園）の地理的イメージの全容を対象とすることを考え、福島県双葉郡富岡町（人口1万6千人）の小都市を選定した。被験者は内省能力（バランス良く地域全体をイメージ再生できる能力）を考えて富岡町に在住する18歳以上の男女をランダムに選定した。調査はマップ法ではA3版の大きさの白紙に自由に描かせ¹⁾、口述法では被験者に口述させた内容をテープに録音し、言語記述法では被験者にA3版の白紙に言語で書かせた。得られたサンプル数はマップ法208人・口述法213人・言語記述法210人であり、これらのサンプルの個人属性を再生技法ごとに表-1に示す。調査期間は昭和62年11月10日から12月14日である。

3. 解析結果および考察

各調査技法によるイメージ再生要素数はマップ法467個・言語記述法354個・口述法184個であり、イメージ再生量はマップ法7317・言語記述法2792・口述法1294であった。これをケヴィン・リンチによる都市のイメージ再生要素の分類にしたがってパス・ノード・エッジ・ランドマーク・ディストリクトに分け、さらにノードを、単に場の状況を示すものを結節点、場を象徴するものを集中心として分類して表-2に示す。表-2に示されるとおり、イメージ再生要素数、イメージ再生量共にマップ法・言語記述法・口述法の順に多く、なかでもマップ法においてパス・結節点・集中心が極めて多く再生されている点が注目される。言語記述法・口述法では再生個数こそマップ法に及ばないものの集中心が非常

表-1 再生技法別個人属性

マップ法

性 別	男	106
	女	102
計		208
在住年数	20年未満	73
	20年以上	135

口述法

性 別	男	96
	女	117
計		213
在住年数	20年未満	71
	20年以上	142

言語記述法

性 別	男	100
	女	110
計		210
在住年数	20年未満	97
	20年以上	113

に高い割合で再生されている点注目される。このことは、マップ法は他の調査技法とは違い言語ではなく地図として描く（視知覚的に表現する）作業により要素を再生するという特徴があるために、言語で言い表わすことのできない要素（名称のないパス・結節点）を再生するためである。マップ法はパス・結節点が多く再生されるという、3つの調査技法のなかでは特殊な性格を持つことがわかる。また言語記述法と口述法では再生の状態が似ていることがわかる。

表-2 イメージ再生要素数とイメージ再生量

要素の種類	パス	結節点・集中心	エッジ	ランドマーク	ディストリクト	合 計
マップ法	4.4 (9.42)	6.2 3.0 3 (13.28) (64.88)	1.7 (3.84)	7 (1.50)	3.4 (7.28)	4.67 (100.00)
	2 1 1 1 (28.85)	1 6 5 2 2 9 4 6 (22.58) (40.26)	4 0 3 (5.51)	5 5 (0.75)	1 5 0 (2.05)	7 3 1 7 (100.00)
口 述 法	1.1 (5.98)	5 1 2 8 (2.72) (69.57)	1.8 (9.78)	4 (2.17)	1.8 (9.78)	1.84 (100.00)
	4.1 (3.17)	8 1 0 3 2 (0.62) (79.75)	1.3 1 (10.12)	5.7 (4.41)	2.5 (1.93)	1.2 9 4 (100.00)
言語記述法	1.2 (3.38)	1.4 2 7 6 (3.99) (77.96)	3.2 (9.03)	5 (1.40)	1.5 (4.24)	3.54 (100.00)
	6.4 (2.29)	2.5 2 3 0 0 (0.90) (82.38)	2.5 8 (9.24)	1 1 0 (3.94)	3.5 (1.25)	2.7 9 2 (100.00)

*上段はイメージ再生要素数、下段はイメージ再生量を示す。

() 内の数値は構成百分率を示す。

つぎに各調査技法での識閾の状態を比較するため、言語記述法と口述法でほとんど再生されなかったパス・結節点を除いた要素について（つまりマップ法の中の単に場の状況を示すところのパス・結節点を除いた要素について）縦軸にイメージ再生百分率を、横軸にその再生順位をとった場合の3つの再生技法の結果を図-1に示す。図からわかるようにマップ法・言語記述法・口述法の順にイメージ再生百分率が高く、イメージ再生百分率はいずれも対数曲線を描いて減少しており、共通にイメージされる景観要素は比較的少数の要素に集中していることがわかる。また、マップ法で最低の値で再生される要素が言語記述法・口述法では再生されないことが多いことからマップ法は他の再生技法より低い識閾を示すことがわかる。比較分析に際して取り除いた、言語では表現できないパス・結節点を加えるとマップ法の識閾は一層低くなる。

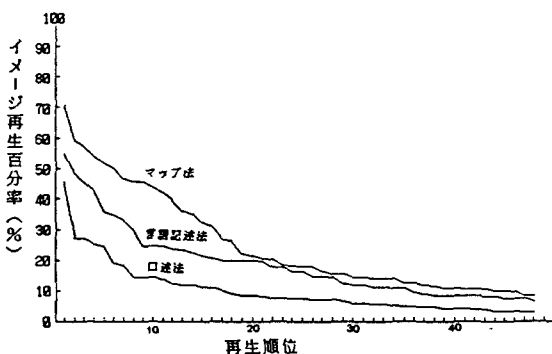


図-1 イメージ再生百分率とその再生順位

なお各技法の要素の内容に関する比較分析の結果については講演時発表する予定である。

4. おわりに

以上の分析結果より地理的イメージの分析のためのイメージ再生技法はマップ法が極めて有効な再生技法であることが確認できた。

参考文献

- 1) 安藤昭、赤谷隆一、船水正雄：都市のイメージ再生技法に関する比較研究、土木学会第43回年次学術講演会、1988
- 2) ケヴィン・リンチ、丹下健三他訳：都市のイメージ、岩波書店、1968